

残心 (ざんしん)

作家・エッセイスト

森 久美子

◆魚になりたい

昨夏、毎晩アテネオリンピックの水泳競技の中継を見ているうちに、私も泳ぎたいという思いが日に日に強くなっていった。

一年生からずっと、体育の成績は二か三ばかり。跳び箱が跳べない、逆上がりができない、ハードル走では、ひとつめのハードルから倒してしまう。運動神経が鈍いというコンプレックスを忘れられるのは、夏のプール学習だけだった。今のうちに、子どもがみんな水泳教室に通うような時代ではなかったから、泳げる子は少数だったように思う。でも不思議なことに私は、なんの努力も訓練もしていないのに、我流で泳ぐことができた。

五年二組の代表としてスタート台に立ち、二十五メートルを泳いだ。よく晴れた夏の空とプールの水の青さ。ホイッスルの音。級友たちの声援。徒競走ではいつもビリだった私が、一着でゴールした。今でもその場面を夢で見ると、うれしいできごとだった。小学校時代の一番の思い出だ。

◆

社会人になって札幌の中心部にある会社に勤めているとき、シティホテルの中にあるスポーツクラブの水泳教室に通った。本来は会員制のクラブだが、夜間は授業料だけで、その施設を利用できた。一年間通ううちに、クロール、背泳ぎ、平泳ぎがマスターできて、退社後の時間を楽しく過ごしていた。アテネオリンピックのテレ



森 久美子 (もり くみこ) さん

作家・FMアップル「北の食物研究所」パーソナリティ

札幌市生まれ

1995年 朝日新聞北海道支社主催「らいらっく文学賞」入賞（作品は、開拓時代の農村の少女を主人公にした小説「晴天色の着物」）以来、多くの連載を持つ。

2002年 第8回ホクレン夢大賞・農業応援部門優秀賞受賞

2004年 農業土木学会賞・著作賞受賞

現在の仕事と公職など

- ・FMアップル「北の食物研究所」パーソナリティ（社団法人 北海道土地改良設計技術協会提供。99年から毎週「食と健康」をテーマに対談。企画・構成も）
- ・北海道教育委員会「子供の食生活を考える研修会」講師
- ・北海道土地改良事業団体連合会・21世紀土地改良区創造運動表彰選考委員
- ・NPO法人 北海道田園生態系保全機構理事
- ・北海道教育大学岩見沢分校 非常勤講師など

著書

「わがままな母親」（芳賀書店）、「母のゆいごん」（共同文化社）

「きゅうりの声を聞いてごらん」（社団法人 家の光協会より12月1日発売）

編著

「北の食と土地改良 全12集」（北海道土地改良設計技術協会）

ビ観戦で、水の中にいるときの快感がよみがえった私は、オリンピックが終わるころ、家から三百メートルのところにあるプールの水泳教室の申し込みをした。二十年以上まったく泳いでいなかったのだから、水を切るようにスイスイ泳げるわけはないが、水の中に入ると本当に気持ちよかった。仕事の都合で、プールにいけない日が続くと気が滅入るほど、この一年、水泳に夢中になっている。以前友人から、魚か鳥か、生まれ変わったらどちらになりたいか質問されたことがある。本当は魚か鳥かというより、「海が好きか、空が好きか」という二者択一の問題なのかもしれないが、私は迷わず、「魚になりたい」と答えた。回遊して世界の海を泳いでみたいと

思ったり、深海魚になって、誰にも会わずに海の底でじっとしていたいと思ったり。プールの水の中で、いつも魚になった自分を夢想している。

◆ほどほどが大切

プールに通っているうちに、段々とうまくなりたいたいという欲が出てきて、泳ぎに行く回数が増えてきた。以前はできなかったバタフライも教えられて、張り切って練習していた六月のある日、二十五日ターンスして、残り十びくらのところで、激しい頭痛に襲われた。とりあえずゴールまで泳いでから、プールサイドに上がって横になった。自分では、酸欠になるほど無理をしたつもりはなかった。

周りの人には重症に見えた

らしく、コーチを始め、プールの事務所の方々も心配してくれた。自力で病院に行こうと思っただが、病院に着くまでになにかあったら困るということ、救急車で脳外科に搬送されることになった。私の母と弟は四十代で、脳の出血で亡くなっている。ヒーローヒーローサイレンが響き渡る車中で、救急病院に運ばれたまま、家に帰ってくることはなかった母と弟の心情を思った。

◆

入院、手術…最悪の事態を考えると、頭が痛いだけでなく、胸まで苦しくなってきた。子どもの教育、仕事、親の今後。部屋が片付いていない。通信販売の代金振込みを忘れている。大切なことも些細なこともいつもいきあたりばったりで

過ごしている自分の人生が情けなく思える。不安と後悔で赤計頭痛がひどくなり、すっかり病人の気分だ。

幸いなことに、検査の結果、異常は認められなかった。救急車の中で腹をくくって、入院の覚悟をしたのだから、頭痛が治まるまでせめて一晩だけでも病院に泊めてもらおうと思っただが、看護師さんに断られてしまった。

「急患が次々に来ますので。痛くなったらまた来てくださーい」

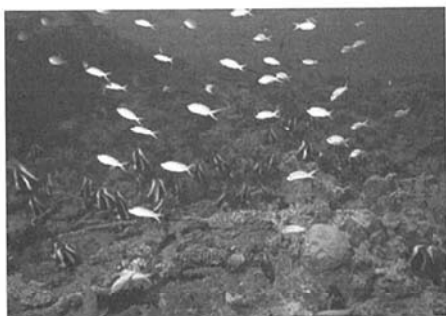
うれしい気持ち半分、まだ痛みが取れていないのに見放されたような心細さが半分。不安な気持ちで帰宅した。翌日は、またこのようなことが起きたときに後悔しないように、溜まっていることを必死で片付

けた。しかし喉元過ぎれば熱さを忘れる。三カ月経った今、相変わらず、緊急事態が起きたときに悔いのないような、きちんとした生活はできていない。しかし、泳ぎ方だけは変わった。「ほどほどに」が大切だと知って、やさしい気持ちでゆっくり泳ぐようになった。

◆残心(ざんしん)

中学生の二男の家庭教師さんは大学四年生で、穏やかで礼儀正しい好青年だ。勉強が終わるといつも、別室にいる私に声をかけてくれる彼を、二男と一緒に玄関で見送った。ところが、十秒ほどでドアが開き、彼がまた玄関に現れた。立ったまま、はにかんだ表情で言う。

「カチャッと鍵をかけられないのが、うれしくて。前から言



いたかったんです」

ドアを閉めた途端に、中から鍵をかける音がしたら、「早く帰って」と言われたようで、寂しくなると思う。エレベーターホールに立っている彼に、鍵の音が聞こえないように、家から彼の余韻が消えるまで数分、間を置いて鍵を閉めている。大学生の彼が、私なりに意識してやっていることに、気づいてくれているのがうれしかった。

◆
物騒な世の中で、いつどんな人が突然家に入ってくるかわからないから、鍵はすぐ閉めなければならぬという考えもあるだろう。もし私に女の子がいたら、そう教えるかもしれない。

実家の母は、お客さんを見送るときは門の外に出て、姿が見

えなくなるまで立っていた。理由を尋ねると、帰ったあとも相手に心を残しておくのが、礼儀だと母は言った。作法の言葉で、「残心(ざんしん)」というぞうだ。

◆
今冬発行される食育実践記、「きゅりの声を聞いてごらん」(社団法人・家の光協会)を執筆しながら、残心は、食べ物への思いにも通じているのではないかと思った。

食材となった動物や植物の生命に心を残す。作った人の気持ちに心を残す。それは、食べ物が無駄にしないという行為で表現するしかない。「いただきます」と言うこと、鍵を力チャツとしないこと、ごちらも他者へのおもいやりであるということを忘れないでいたい。